

高度経済成長期における農村生活の「合理化」過程とその帰結

——家庭科教育と生活改良普及事業を焦点に——

増 田 仁

The process of 'rationalization' in rural life during high growth period in Japan:

With a focus on home economics and life improvement spread business

Megumi Masuda

(Received September 29, 2017)

This paper analyzes the practice of Home Economics and Life Improvement in society in rural community during the high - growth period in Japan. Home Economics tried to improve rural lives. But there is some possibility of causing conflicts in family. On the other hand Life Improvement in society promoted 'rationalization' in rural life. But at group works rural women enjoyed talking unrelated house work.

After 1960s many women worked at factory, it was difficult to get together.

Key words : Home Economics, Life Improvement in society, Life of 'rationalization'

1. 問題の所在

本稿では、高度経済成長期に行われた家庭科教育や生活改善普及事業に焦点を当てながら、女性、特に農村女性をどのように、どのような家事労働者へと回路づけ続けていったのか、その過程と帰結を分析していく。「問題」を抱えていると見なされた農村生活を「合理化」させようという農林水産省が統括する生活改良普及事業や旧文部省が統括する高等学校家政科の諸実践と農村社会との関係はどのようなものであり、葛藤をはらみながらどのように地域生活が変容していったのだろうか。本稿では、特に家庭科のなかでも学校から地域生活に介入し、「改善」を行おうとした実践であるホームプロジェクトに焦点を当てる。

戦後、学校も社会教育も地域の生活「改善」に関心を示し、実践を行ってきた。両者は連動しながら、どのように地域生活（家庭生活）を「指導」しようとしていったのだろうか。その一方で、行政による家（つまりは地域）を通した「改善」と学校を通した「改善」が生活の当事者である農村女性たちにどのように受け止められ、どのような帰結に至ったのか。学校による介入の仕方、社会教育による介入の仕方双方の影響と限界を分析しながら、高度経済成長期における農村での家事労働者形成過程を分析していく。

民衆史の分野では、時には民衆の無関心や疑問、読み替えをも呼び起こし、地域の人々に行政関係者の意図通りには広まらない生活の「合理化」、ズレていく（つまり別のものに読み替えられる）「合理化」、下からの「合理化」が理論的・実証的に研究されてきている（セルトー、1980=1987）。これらの先行研究を踏まえながら、家政学的教育が人々にどのように受け止められ、影響を与えつつも、時には読み替えられていったのかを実証しつつ分析していく。

家庭科教育学においては、教室内部での家庭科の教授方法の研究が主になされており、戦後誕生した家庭科を中心に形成された「新たな」家事労働者が地域生活にどのような変革をもたらしていったのかという問題関心は希薄な傾向がある。アメリカナイズされた家政学教育の中心的実践であったホームプロジェクトは、家庭科の教育内容を生徒を通じて地域に広めることを目的としており、家庭の「民主化」を御旗にラディカルなまでに敗戦後の日本の生活を変えようとしていた。しかしこれまでの家庭科教育学では、教育内容の地域への影響よりむしろ学校内部での活動に分析の焦点が当てられてきており、社会変革の運動体としてのホームプロジェクトという視点は弱かった。また、生徒や地域の住民といった教育の受け手の側から見たホームプロジェクトを含む家庭科

教育の実践の分析という視点はほとんど打ち出されてこなかった。

教育社会学における「ジェンダーと教育」においては、社会教育とジェンダーという領域の開拓が進められている。天野（2005）による女性たちによるサークル活動の戦後史に関する研究をはじめとして、地域に生きる女性たちの声を掬いあげていく作業が高度経済成長期以降から続けられている。家政学教育を中心とした農村地域における女性教育の戦後史（4Hクラブや若妻会などの社会教育を含む）を先行研究としながら、高度経済成長期における生活改良普及事業と家事労働者化過程の関係を分析していく。

また、教育社会学では制度化された学校を主な研究対象としてきた。今後、教育の双輪をなす社会教育の諸実践を社会的に考察する必要がある。というもの、人々は制度化された学校という場を経て、社会教育（地域教育）に包摂されていったからである。双方の場を連結・連動したものと見なして人々の社会化や「教育」の変容をとらえなければならない。また、地域が学校に影響を与え、学校が地域に影響を与え続けてきた。両者は明確に分けられないにもかかわらず、主に別の分野で研究が蓄積されてきた。社会的に統合しつつ、家事労働者化過程を見ていく必要がある。

様々な学問知の実験場となったのが、敗戦後の農村地域であった。敗戦後、物心ともに傷を負った人々の生活のたしなめを家政学教育がどのように行おうとし、どのような帰結をもたらしたのかを分析していく。その際、戦後史研究を参照にする（大門ら2010）。大門（2012）は戦後の「生活」「いのち」「生存」に関する諸問題の整理を行っている。本研究では家政学エージェント（生活改良普及員、家庭科教員ら）と農村生活者の接触領域を見ていくことで、「生活」や「生存」をめぐる地域末端レベルで何が行われ、何をもちたしていったのかを分析していく。

具体的に用いる資料・データは以下のとおりである。まず、雑誌『家庭科教育』『家庭クラブ』や旧文部省発行のホームプロジェクトの手引書、生活改良普及事業の記録や記念誌等の文献資料から政策実施までの社会的背景や実施状況、家庭科教育に関しては生徒やその親、生活改良普及事業に関しては農村女性が家政学的指導をどのように受け止め、生活現場で実践していったのかを見ていく。さらに、生活改良普及員へのインタビューデータから、文書資料には書かれない指導現場の実態、特に指導が生徒や農村女性に貫徹しない時の指導方法の変更や指導対象者の諸対応に着目しながら分析する。

2. ホームプロジェクトを通じた生活の「合理化」過程

戦後の家政学教育も他教科同様アメリカ化が進められ、その中心的位置を占めたのは家庭クラブとホームプロジェクトであった。1948年にホームプロジェクト・家庭クラブが導入され、ルイス、ウィリアムソンによって普及活動が行われた。ユニットキッチンを取り入れた台所改善や型紙を用いて裁縫教育を効率化させるなど、今日の家庭科教育に与えた影響は大きい。家庭クラブの会員数は発足当初から20万人近くおり、以後2倍以上に増加していき、規模の大きな組織であった。「愛情」「勤労」「奉仕」といったキーワードにみられるように、家事労働が無償であり「愛」による労働であることを前提としていた。1960年代までは実践課題には特に農村の生活改善が多くみられた。この組織は、封建的な農村社会、特にカネも発言力もないまま生産労働と家事労働に追い立てられる嫁の困難を改善しようと、農村のユートピアの実現に向けて活動していたことが分かる。その背景には、家政学を中心に統計的手法を用いながら生活時間調査が実施され、睡眠時間が短く労働時間の長い農村女性の問題が「発見」されていたことが挙げられる。これらの調査結果に基づきながら、旧文部省と農林水産省が手を取り合い、学校教育と社会教育が連携して、家庭科教員と生活改良普及員が生活を「合理化」させようとする力の先鋒となっていった。しかし、家庭クラブが提案する実践を生活に取り入れられたのは、一部の富裕層のみであった。家庭の「民主化」を教え、実現させる教科として成立した家庭科であったが、「民主化」していない家庭（とその生徒）の間では合理的な生活をめぐって葛藤が生じていた。家庭の「民主化」ではなく家事技術の伝達に重きを置いた教育に対する地域の要求にこたえる形で高等学校に職業に関する教科として「家庭技芸」が設置されていった。以下は高等学校教科課程表である。

高等学校教科課程表

家庭：一般家庭（7-14単位）・家族（2単位）・保育（2-4単位）・家庭経理（2-4単位）・食物（5-10単位）・被服（5-10単位）

家庭技芸：保育（6-15単位）・保育実習（6-20単位）・小児保健（4-10単位）・小児栄養（3-5単位）・栄養（3-10

単位)・食品(3-10単位)・献立(3-10単位)・調理(5-15単位)・大量炊事(3-15単位)・食物経理(3-10単位)・被服材料(3-15単位)・被服経理(2-10単位)・色彩(2-5単位)・意匠(2-10単位)・仕立(6-20単位)・手芸(3-15単位)・被服史(2-5単位)

(昭和24年1月制定 新制高等学校教科課程中職業教科の改正について より)(下線は増田)

多様な教科が教えられていたことが分かる。特に保育関係の単位数が多い背景には、農村において乳児死亡率が高かったことが挙げられる。戦前の高等女学校のカリキュラムを引き継いだため、単位数も非常に多かった。下線を引いた科目(「保育実習」と「大量炊事」)については、農繁期への対応が意識されていたと考えられる。しかし、高等学校家政科の進学率は減少の一途をたどった。以下の表を参照しよう。

表1：高等学校学科別生徒数の推移
(出典：日本家庭科教育学会編『家庭科教育50年』建帛社、2000年、p.284)

年	合計	家庭	割合
1955	2,571,615	211,981	8.24%
1960	3,225,945	252,350	7.82%
1965	5,065,657	277,044	5.47%
1970	4,222,840	220,178	5.21%
1975	4,327,089	195,314	4.51%
1980	4,616,339	161,170	3.49%

高等学校家政科への進学率が減少していった背景に、家庭科を学ぶことが大学進学に不利になったことが挙げられる。ある保護者は次のように述べている。

保護者「わたくしの娘は高校入試の際、大学進学に不利であるからとこれ(=家庭科)を拒みましたが、第一学年のときでも家庭科をとるように勧めました。わたくしたちの時代には家事・裁縫をとっても大学へ入学できましたが、現在の高校生で大学を希望している者は、ただ進学進学と入試のとりこになって、女学生らしいゆとりも楽しみも味わえない状態です。そして男子高校生と競争してゆかなくてはなりません。これは一面女子教育向上のために喜ばしい現象ではありますが、家庭科を素通りした、この娘たちが成人した場合、はたしてどのように家庭の処理をしてゆくかということに不安を感じます。またこの大学進学と家庭科の矛盾に対しても、考えさせられます。」(文部省 1959 p.30)(下線は増田)

将来主婦になった時には必要な科目ではあるが、男子高校生と競争する大学入試では受験科目ではない家庭科の勉強は不利になる。家庭科という教科は学ぶ時期と役に立つ時期にタイムラグがあるのである。

統括機関であった、旧文部省はホームプロジェクトをどのように位置づけていたのだろうか。

「アメリカの家庭生活は高度に進んでいて、生徒のプロジェクトの題材になるものが少なく、わが国の家庭生活にはそれが豊富であるということにもなる。このように改善の余地を多分に持つわが国の家庭生活学習にいつそうこの方法を広めて家庭生活の向上をはかることは回復途上にある今日のわが国にはいつそう重要なことである。」(文部省 1952 まえがき)

戦勝国であり消費社会を謳歌しているアメリカと敗戦国であり復興半ばの日本の違いが指摘され、その差を埋める解決策として旧文部省はホームプロジェクトが有効であると見なしている。

現場の教師たちはホームプロジェクトをどのような理念のもと指導していたのだろうか。

家庭科教師の手記「実際生徒は、自分の家庭を自由な立場で鋭く批判し、理想を描いてそれを実現しようとする強い意欲をもつものであります。…わたくしたちは強い信念をもって、根気よく、生徒たちがホームプロジェクトに対する燃えるような意欲をもつように指導してゆきたいものであります。それがわたくしたち家庭科教師に与えられた誇であり、使命であると考えます。」(文部省 1959, p.19)

「自分の家庭を自由な立場で鋭く批判」することで、これまでのやり方で生活を営んできた親や祖父母との間に葛藤を生じさせる可能性があった。「改善」に燃える生徒たちや教員の指導と農村家庭の間には、理想と現実をめぐって齟齬が生まれようとしていた。

高等学校校長の手記「家族のわがままな不規則な生活が、いかに母を苦しめているか、睡眠を妨げ、目まいや頭痛を日にひきおこさせる原因ともなっているか、それをつきとめて、母を救いたいと悲願する子の心、家庭の本義に照らしあわせて、あられもない方向に向かいつつある不明朗な家庭、その家庭にかぶさっている黒雲を払いのけようと懸命に努力する純情、根づよく巣くっている封建的傾向、それに対して新しい感覚・思想をもつ少女の鋭い切開手術をこい願う清らかなメス、こうした切々たるそして暖かい春のような少女のもつ純情をみるのが、プロジェクトに現れた家族関係である。」(文部省 1959, pp.23-24)

「封建的傾向」をもつ「不明朗な家庭」に対して「新しい感覚・思想をもつ少女の鋭い切開手術」が行われるとき、家庭内での意見の対立や葛藤が伴う可能性は大きい。家庭にとって良かれと思って家庭科教員らが指導しているホームプロジェクトが「意図せざる結果」として家庭内に不和を持ち込む要因となってしまう恐れがあった。

不就学者が多くみられたことからわかる通り、戦後初期においては戦争による家庭への打撃は大きかった。敗戦から家庭や若者がどのように立ち上がるかが、ホームプロジェクトの課題であり革新性であった。しかし、ホームプロジェクトは巡回指導等、教員、生徒(親)の負担を増加させていき、経済的・時間的に余裕のある家庭での実践にとどまった可能性は大きかった。

3. 生活改良普及事業を通じた生活の「合理化」過程

戦後初期から高度経済成長期にかけては特に、農家に生まれながら、都会での結婚を望む女子が多く存在した。単調で過重な農業労働や封建性への嫌悪がその背景にあったことが、次の記述からうかがわれる。

「青年団がありますが、たまたまその家政部の事業として結婚についての世論調査をしたところ、農村を希望するものは僅か二十%、あとの八十%は都会を希望しておることが判りました。

この様に何故農村に生まれ、農村で育つた私達若い女性が都会にあこがれるのでしょうか。それには過重労働による生活の単調さや封建制など、いろいろな農村生活の不合理が原因としてあげられました。」(栃木県農業改良課 1956, p.54)

農村の未婚女性にとって選択肢は農村を出るか、農村を変えるかしかなかったのである。自分の意思であれ、意思に反してであれ、農村にとどまらざるを得なかった女性をターゲットに生活改良普及事業は生活の「合理化」を推し進めていったのである。

以下は当該期に農村で歌われていた「生活改善の歌」である。歌を通して、行政側はどのような生活へと農村の人々を導こうとしていたのかを読み取ることができる。労働歌や歌声喫茶などに見られるように、共に唄うことが気持ちを一つにする手段としてこの時代に広く用いられた。民衆へあゆみより、民衆を楽しませながらの啓蒙活動が行われていたのである。

「うたいましょう / 生活改善の歌（「/」は改行）

1. 窓を大きくひらきましよう / 光がいっぱい射すように / そよ風そよそよ来るように / 明るい住居はみんなの胸に / 元気な希望を持ってくる。
2. 知恵でくらしをたてましよう / 工夫いっぱい重なれば / あの夢この夢ふくらんで / ゆたかでのしいくらしの花が / みんなに笑顔をもってくる。
3. 力あわせて築きましよう / たのしく栄える家や村 / 仲よくしっかり手をくみ / 伸びゆく時代の夜あけ / いのちの花束咲かせましよう」（さくら市ミュージアム収集文書 15 出版年不明 頁数不明）

歌の1番からは窓を大きくとり明るい住宅にしていくことが大切だと訴えている。2番からは、経済の問題ではなく、工夫や知恵で暮らしを良くすることが唱えられている。3番では、協力し合って共に暮らすことが歌われている。

暗い住宅を改善するため、台所や寝室に窓を付ける作業が行われたことが、以下の生活改良普及員経験者へのインタビューからうかがえる。

普及員 A さん「住宅にも窓をとりつけましよう、それから真っ暗い台所でね、寝室もまっくらだから、じゃあ天井に明かりとりをつけましよう、とかそういうことで始まったわけね。」

普及員 A さん「(便所について) 穴が開いてね、ほんとに板がこうあって、それだけの話なのよ。もう用足してる間中、落ちたら大変、落ちたら大変、ってそればかりでさ、すごいな—と思ったもの。そういう状態だから、衛生なんていうのには程遠いよね。」

生活改良普及事業の理念として健康を守るために「合理性」を学ぶことを元普及員は述べている。

普及員 A さん「最終的には、健康を守る、それから一番だね、健康を守るのがね、それとあとは、どういうふうにしたらそれをできるかっていうそのやり方の中で、合理性っていうのを学んでことだよね。」
(下線は増田)

普及員 A さん「私流に言わせれば、合理性の習得だと思うんだよね。で、そういうふうには、なんか頭の中の回転と、実際の場面としての改善と合い平行してやってきたように思いますね。30年代ね。」(下線は増田)

共同性つまり共に暮らしていくことが根付いていた高度経済成長期前半の農村に「合理的」な生活様式を浸透させていくことを目的として、普及事業は展開していった。

普及員 A さん「当時は農村ってのは、ほら農作業だって結ってという形でみんな共同でやったり何かしてましたからね。共同で何かしようという精神がすごくあったわけですよ。だから、ちょっとした家の改善するなんてのも、みんな手だしあって、得意な人もあったし、大工さんできる人もあったり、でやってたようですね。」

「合理的」な生活様式の一つに家計簿記帳があった。年に一回しか収入のない農家が、何にどれだけカネを費やしているかを舅・姑ではなく嫁が把握することに、この活動の革新性があった。しかし、嫁が家計を知ることについて舅・姑からの反発もあった。

野菊会（栃木県旧氏家町の女性団体）の家計簿記入活動

「何しろ嫁の立場であり、実際に自分で家の経済のやりくりをしている人は会員の三分の一で、外は親達でありますので記入するにしましても、色々と遠慮勝ちでありましたが、家族の方々の理解で、一か年全員揃ってつけ通すことができました。」(栃木県農業改良課 1956, p.11)

普及員 A さん「家計簿記帳つつつても、家計簿をなぜつけなきゃなんないのか、っていう話からね。男性の側が女性が一生懸命家計簿つけてると、『なにやってんだー、出るだけ、入るだけ入って、出るだけ出れば、分かっべ。』ってこういう。そうすると、1週間やろうと思っても、ギャフンときちゃうでしょー。で、私らが言っても、『家計簿記帳なんかやって何すんべ？家計簿記帳したからっ金でも貯まるつつうのけ？』っなんてそう言われる。で言われたって別に溜まりやしないけどもね。でもやっぱり自分ちはどれくらい、どういう暮らしをしてんのかの実態を知るためにも、家計簿記帳必要だし。子どもたちがね、学校へこれから行くなんつう時には、どこを、は切り詰められるけど、どこは切り詰められないとかって、そういう目安だっつけてなければ分かんないでしょうな。あるいは、現金ってのはなかったからね。で、それが高度成長期に入って、ほら、どんどんみんなが出稼ぎに出るようになってからは、現金もある程度入るようになったのよね。だけど、なかなか女の人たちが使うつつうには大変だったですよ。」

家計簿記帳を嫁が行うことで、舅・姑から「そんなことをしてもカネはたまらない」と小言を言われながらも、彼女たちが家庭の経済状況を把握し、カネの重要性を再確認し、ひいてはどうしたらカネが稼げるのかを考える契機となったのである。

クラブ活動実績

12月 懇談会「嫁と姑との立場について」(婦人会)(栃木県農業改良課 1956, p.58)

嫁と姑の関係が公的な場において話し合いの対象となっていたことは、戦後の「民主的」な家庭の建設という理念にのっとっていたことが分かる。女同士の家庭内での立場の違いとそこから生じる葛藤の解決について社会教育が取り上げるべき議題となっていたのである。

普及活動は女性のみを対象にしていたが、その限界を普及員は懐古的に述べている。

普及員 A さん「奥さんに言っただって、奥さんが、『はい、そうしてください。』つつつたって、旦那の方が『駄目』ってばそれっきりだからね。」

普及員 A さん「女性だけにいくら仕掛けてもね、実現っていうのは難しい…。仕掛けても仕掛けても実現しない。それはやっぱり男性にも仕掛けなかったから駄目だったんじゃないかなあ、って今にして思いますけどね。」

普及活動は女性をターゲットにしていたが、家庭を変えるには男性の協力も不可欠だったのである。女性のみを対象としたことがこの活動の限界でもあった。しかし、同性の同年代の女性たちが集う生活改善グループには同じ立場の者だからこそ共感し合える雰囲気に満ちていた。

普及員 A さん「みんな月に1回くらいはでも喜んで集まってきましたよね。そういう中で、みんな、家庭から解放されたっていう一つのあれも、喜びもあったしね、お友達と一緒に会って、色んなあんとこはは、あだねこうだねって話し合っって、気分的な解放感も味わえたしね。なかなか、生活改善グループの指導っていうのも、決まったようにはいかなかったですよ。グループによっちゃ、もう、ほんとに理屈っぽい人がいて、哲学的な話しをさかんとするグループもあったし、歌が好きなグループもあったしね。」(下線は増田)

生活の「合理性」を学ぶこと以上に家庭から解放されたことの「喜び」が女性たちにはあった。農村女性たちにとっては、労働の場である家から出て、同世代と集えればよかった。集うことに意味があり、テーマは家事労働に関するものでなくても、議論でも歌でも共有できるものがあれば何でもよかったのである。楽しみを主軸とした生活改善グループの読み替えが農村女性たちによって行われていた。言い換えれば、家政学教育の民衆による横領ともいえるべき行為が見受けられたのである。

普及員 A さん「お嫁に行っって普段いないんだからさ、実家にきてまでなんだかんだ言う必要あるまい、と

思うんだけど、あんがい実家へ来て色々色々言うのは、嫁に行った娘なんかが言うんだよね。だからまたそういうの考えると、お嫁さんの立場の人にしてみりゃさ、親がいて、夫がいてでしょ。それで自分はもう、無我夢中で働いてて、子どものことも面倒みてやりたくても面倒みてやれない、お金使いたくたってそのお金もないっていう状況の中で、今度は何かやったからって、今度は嫁に行った娘にまでなんだかんだ言われたって、そんなの立つ瀬がないもんね。」

義理の親や夫、小姑にいびられ、経済もままならない状況下で、家を出られる喜び、友達と会える喜びが生活改善グループにはあったのである。

普及員 A さん「結局テレビをつければそういうものやってる。ラジオでも聞ける。ということが、今度は自分達グループで、一緒に勉強しなくても大丈夫、みたいな。そういうのも逆に出てきちゃうんだよね。」

家電製品の普及が生活改善グループの意義を縮小させると同時に、カネが必要な農村女性たちを労働市場に引っ張り出していった。テレビという娯楽の普及が、人々が集うことの価値を減少させていったのである。

普及員 A さん「40年代だけでも、みんな行くでしょ。そうすると、今度は、我々が、『何々グループで何々しましょ』ってこう言ってもさ、そういうどころじゃないわけさ。お金稼ぎに行ったほうがいいから。うーん、『普及委員の言うことなんか聞いてる暇ないよ』みたいな感じで。口には出さないけども、都合悪いんだわとか。誰さんが来れないんだわ、とか言ってなかなか集まり持たないわけよ。で、みんな一生懸命働いて。でうじやのではにかかゴムってとこに行っていたのは、我々はわかってたわけさ。そうすると、25日がね、あの一、給料日なのよ。そうすると、街中の、『今日は給料日だからね、あそこいってみな。みんないるよ。』つって、あそこつうのは、化粧品屋さんなんだけど。で普及委員が、こう私ら行ってみるのね。そ知らぬふりしてこうやって見るとさ、クラブの人たちが、グループの人たちが、どんどんどんどん来て、『へい、何してんだい？』って聞くから、『えっちょっとね』、とか言ってさ、ごまかして見ていると、みんな化粧品買う。そうでなくっちゃ、なかなか自分のものなんて買えないでしょうな。やっぱり、一番先に考えるのは、子どものもの、ね。それから、おっ、旦那さんにも少しお小遣いあげましょう、とかさ。おばあちゃんやおじいちゃんにもちっとはしなきゃ、ね。気よく出してもらえないっていうのがあるでしょ。化粧品になんかなかなか回らないから、給料日に口紅買うとかさ、おしろい買うとか、櫛を買うとか、見てた範囲じゃそんなもんだったけどさ。今どきじゃないから、そんなに金もかかんかったんだと思うよ。あんまり眉だなんだってしなかったらうからね、でも、女の人ってさ、そういうの買いたいでしょ。で、お化粧品もしたいよね。やっぱり、そら、化けたって、なにほど化けか知んないけどさ。ちっとは化けたいもんねー。でもなかなか、そんなのも買えないし。…みんな40年代っていうのは、そうやってみんな働きにいった。でも、逆に言えば、働きに行ったから、自分の買いたいものが買えた。」

1960年代になると生活改善グループが成立しにくくなる。農村女性たちは工場労働に参入して多忙となり、その代わり賃金を得ていく。共同性によって支えられていた面が大きかった農村に、賃労働の浸透と共に、消費という個人的な娯楽が徐々に広まっていく。生産労働や家事労働に明け暮れていた女性たちに美しくなることへの欲望に火をつけたのも消費経済であった。

4. 結論

高度経済成長期のホームプロジェクトと生活改良普及事業の両者を見ていくことで、農村において学校から地域へと女性たちがどのように家事労働者化され続けるのか、そのプロセスにおいて地域の人々はどのように受け止め、取り入れたり読み替えたりしてきたのか、その一端が明らかになった。

学校が地域に入り込んでいった契機の一つがホームプロジェクトであった。「改善」すべきものが農村にあると見なされ、「改善」できる力が学校（や地域）にあると思われていた時代であり、家庭生活の諸「問題」が「発見」されていったが、活動における主に時間的負担の大きさが継続を困難にしていた。

生活改良普及事業による家事労働者化過程を考える上では、「合理的」生活の内実が、高度経済成長期の前半と後半以降では変容していったことを視野に入れなければならない。具体的には、頭を使い共同で生活すること

から、個人でカネを稼ぎ使うことへと生活を営む上での価値観が変わったのである。歌や集団での活動など民衆に寄り添った統治を行政が行う一方で、その内実を読み変え自分たちの「楽しみ」を見出していく民衆の姿があった。

謝辞：生活改良普及員経験者にはインタビューに応じていただいた。また、栃木県さくら市ミュージアムでは資料をコピーさせていただいた。ここに謝意を表したい。

参考文献一覧

- 天野正子『「つきあい」の戦後史』吉川弘文館、2005。
朴木佳緒留・鈴木敏子共編『資料からみる戦後家庭科のあゆみ』学術図書出版社、1990。
J. ドンズロ（宇波彰訳）『家族に介入する社会』新曜社、1977=1991。
増田仁『高度経済成長期における家事労働者形成過程の再検討』風間書房、2014。
M. セルトー（山田登世子訳）『日常実践のポイエティック』国文社、1980=1987。
文部省『家庭科 ホームプロジェクトの手びき』1952。
文部省『高等学校家庭科 ホームプロジェクト運営の手びき』1959。
日本家庭科教育学会編『家庭科教育 50 年』建帛社、2000。
大門正克ら編『復興と離陸』大月書店、2010。
大門正克ら編『過熱と揺らぎ』大月書店、2010。
大門正克『『生活』『いのち』『生存』をめぐる運動』安田恒雄編『社会を問う人びと』岩波書店、2012、pp.168-196。
大金義昭『風のなかのエリア』ドメス出版、2005。
生活研究同人会編『近代日本の生活研究』光生館、1982。
栃木県農業改良課『クラブ活動のあしあと 第六回農村青少年クラブ実績発表大会発表集』1956。
著者名不詳「さくら市ミュージアム収集文書 15」出版年不明。

本研究は JSPS 科研費 JP16K02040 の助成を受けたものである。